

炎の中をにげまど<sup>ほのお</sup>

キーン!! キーン!! キーン!!

忘れもしないこの音。まつ黒なB29の巨体が、頭上四、五千メートルに見えたかと思うと、パチパチパチパチという豆鉄<sup>ぼう</sup>のような音とともに、いくすじもの光が走った。

「これは、いつもの空襲とはちがう。みんなのいる方へ走るんだ。」そう思った私は、防空壕から飛び出した。

まわりは、一しゅんのうちに、白夜<sup>びやくや</sup>というより黄色い世界となつた。その中を、ころげるよう走つた。防空ずきんにも、肩にも火の粉は、じくじくと燃え広がり熱い。

約五十メートル、夢中で火の中を走る。途中、四、五人の友人がバケツリレーをしていた。校舎の天じょうが赤黒く燃えている火を

関

咲

子



消そうとしていたのだ。しかし、こびりついた油脂焼夷弾は、水をかけるとよけいに火が広がった。日ごろの訓練も、何の役にも立たなかつた。「逃げよ。逃げよう！逃げよ、逃げよう！」とさけぶ先生の声。白い煙の中、友人と手と手をつないで、必死で門の外へ逃げた。

当時、十五才のわたしは、戦争を正しいと思い、必ず勝つことを信じて、少しもうたがうことがなかつた。今の子どもが平和のありがたさを感じられないように、当時の子どもも、戦争や世の中の流れをあたり前だと思っていた。決して、反対など言えなかつた。

食事も非常にまずしい。細かくぎざんださつまいものつるがいっぱい入り、お米など数えるほどしか入っていらないダブダブのぞうすい。ふかふかにむしたさつまいも。それが、どれほどのごちそうだつたろうか。静岡市の私の学校の運動場も、次々とさつまいもの畑に変わつていつた。

その愛すべき母校が、今、炎とかしている。天をつくようにまつ赤に燃えさかつた炎が、ゴオーッという大きな音をたててくずれた。それが、校舎の最後の姿だつた。

その時、はじめて、とめどなくなみだが流れた。生きて助かつたのだという思いよりも、目の



前の三十メートルに見たまつ赤な炎に恐れおののいた。

どれほどの時間がたつたであろうか。気がついたら近くのお寺にいた。そこで、まどろむ間もなく、夜が白々と明けた。

食料倉庫のあとから、ドロドロの砂とうが出てきた。だれかが、どこからか水をくんできて湯をわかした。そして、砂とうをとかして飲んだ。別れの砂とう湯であった。

黒山のような人ばかりの静岡駅で、何時間もかかるて、やつと手に入れたきっぷ。汽車は、おくれるなどというものではなく、めちゃくちやの時間であつた。まだから乗りこむ人、あみだなによじのぼる人、だれもがおなかをすかしていたせいか、むつりして元気がなかつた。現在のように、丸々とふとつた体、まつ赤なほお、にこにこ顔の子どもはどこにもいなかつた。

姉と私は、ようやく乗れたデッキの入り口あたりにいた。デッキだけで、二、三十人はいたであろうか。ちょっとのすき間もなく、首すら動かすことができなかつた。人と荷物の間で、息を殺し何も考えなかつた。

姉は地下たび、わたしは穴のあいた古い運動ぐつをはいていた。そうだ、あの焼けた家のおし入れの中には、父のかたみともいえる黒いピカピカの革ぐつがあつたのだ。今でも、まぶたを閉じれば、あの生まれて初めて買つてもらつたスマートな革ぐつのすがたが目にうかぶ。

——さよなら、静岡——。わたしは運命のあやつる糸のままに、汽車にゆられていつた。

あれから三十七年、墓参りには帰るが、二度と静岡に住むことはなかつた。

(半田市有脇町在住)